

性論に、密教思想が積極的に受容されると、その行きつくところは観念的な仏凡一体論で、日本中古天台が真如遍滿をいう余り、本覚ずわりの著しい即身是仏主義に墮つてしまったのも当然のことと思われる。法然・親鸞・道元・日蓮と叡山を捨てた鎌倉仏教の祖師達には、その思想の底に、この中古天台の観念的な仏性論＝成仏論を拒否して起った共通した宗教意識がある。それは教・行・信の具体的実践への志向である。聖人の場合は下種論に頭われている。しかし、鎌倉仏教をみるその前に、日本浄土教の祖と仰がれる源信の仏性論を検討しておく必要がある。『一乗要決』で天台の仏性を強調した源信が、その仏性開発を弥陀の仏力に求めんとしたその傾向は、形としては聖人の仏種論に一脈通ずるものがあるからである。ただし、常不軽品を下種折伏の文証とし、その二十四字と五字の題目を一体とする聖人の仏種思想が、独特なものであることはいうまでもない。

## 久遠釈尊の因行果徳について

庵 谷 行 亨

天台大師は法華經壽量品の「我本行菩薩道時所成壽命」に本因妙、「我成仏已來甚大久遠」に本果妙を論じ、久遠釈尊の因行を本因、釈尊の久遠成道を本果と規定している。日蓮聖人はこれを継承して「我本行菩薩道：」に「我等己心菩薩」、「然我実成仏已來：」に「我等己心釈尊」を論じ観心の法門を説示されている。特に『観心本尊抄』の釈尊論には釈尊の因果論が大きな比重を占めており、これが観心法門の論理的帰結を導くのである。以下『観心本尊抄』を中心に釈尊の因果論について考察してみたい。

聖人が因位果位を論じられている主要な遺文として『開目抄』『観心本尊抄』『法華取要抄』等を挙げることができる。これらの遺文によると①釈尊と他の諸仏を比較対して因位果位を論じる場合、②本門と迹門を比較対して釈尊に因位果位を論じる場合、③釈尊の久遠成道に因位果位を論じる場合などが指摘できる。

『法華取要抄』には、因位を論ずれば諸仏は三祇、五劫、釈尊は三千塵点劫、果位を論ずれば諸仏は十劫・百劫・千劫已來の過去仏、釈尊は五百塵点劫已來妙覺果滿の仏であるとし、尽十方の諸仏は教主釈尊の所從であることを明示し、『観心本尊抄』には、諸仏は「近因果」を説いて「遠因果」を顯わさないゆえに「三五遠化」を亡失するものであると論断されている。これらは遠近によって釈尊と諸仏を比較対し、釈尊の絶対性を論証するものである。②の例として『観心本尊抄』には教主釈尊論を展開し、爾前迹門と本門に分別して釈尊の因位果位を論じられている。爾前迹門の意をもって論ずると、釈尊の因位は能施太子・儒童菩薩・尸毘王・薩埵王子・三祇百劫・動逾塵劫・無量阿僧祇劫等と積劫行滿の仏であり、果位は始成正覺の仏で四教の色身を示現して正像末三時を利益し給う仏である。これら迹因迹果は本門教主釈尊の方便施設であり、本門の因位果位が明かされることよって、それが明瞭となるのである。本門の意をもって論ずると、教主釈尊の因位は久遠より已來、十方世界に分身し一代聖教を演説し塵数の衆生を教化し給う仏であり、果位はいうまでもなく久遠成道である。本門の因果は発迹顯本において成就するゆえに、『開目抄』

にこれを「本因本果の法門」と説示されている。こうして諸仏と釈尊、爾前迹門と本門の因果が明かされることよって、『観心本尊抄』では凡心具仏の結論として「受持譲与」が説示されるのである。爾前迹門の釈尊と本門の釈尊の因位果位を論じて本門の教主釈尊の絶対性を論証する基準は、因果の遠近にあるのであって、これは先の諸仏と釈尊の比較対の分別と同じである。③は言うまでもなく本門の因位果位論である。本門の因位果位論は教主釈尊の絶対性を開顯し、釈尊こそ諸仏を所從とする唯一の教主であることを明示するものである。このような本門の教主釈尊の因位と果位を聖人は受持譲与段に「釈尊の因行果徳」と表記されたのである。

受持譲与段にみられる五字と釈尊の因果の論理的背景には一念三千（色心因果）・仏種・要法・宝珠・良藥等の問題が関連している。一念三千とは釈尊の色心であり、この釈尊を我等の教主として行化の因と万徳の果にみるのが因行果徳の釈尊である。このような一念三千の基本原理を背景に、釈尊の色心が因行果徳であり、その因行果徳が仏種であるところに釈尊の因行果徳と妙法五字の關係が成就するのである。

論理的に十界の互具を論じて「己心の釈尊」は論証

しえない。それは釈尊の具足が五字受持者の己心のみ実現しうるものだからである。『観心本尊抄』の互具論が凡心具仏界から凡心具釈尊へと移行し、釈尊の因位果位論にまで発展しているのは、我等の成仏が単なる理論論的解明で証明されるのではなく、五字受持なる信仰的実践にこそ実現しうるからである。さらにまた、五字の受持が釈尊の因行果徳の受領であるゆえに、釈尊や地涌の菩薩を己心に具足しうるのである。天台大師の、本果妙の依文に「我等己心釈尊」、本因妙の依文に「己心菩薩」を証されたのは、聖人にとって本果妙とは久遠成道の釈尊、本因妙とは久成の人たる地涌の菩薩であるからである。

以上、『観心本尊抄』を中心に、聖人における釈尊の本因本果について概観した。日蓮聖人の本因本果の概念は久遠成道を本果、久遠の化導を本因とする点において基本的に天台大師と異ならないが、とくに観心において本因を地涌の菩薩として、受持の当処に本因本果を己心の所具とすることは他に例を見ないのである(1)。それは釈尊を論理的に規定してその本質を論証した天台大師に対し、聖人は受持という自己の主体において釈尊を受領していったことの異なりによるものである。

〔註〕

(1) 茂田井教亨先生は『観心本尊抄』に聖人の特異な四菩薩観があるとし、その第一にこれをあげられている。本稿は茂田井先生の教示に示唆されるところが大きい。

## 寿量頭本論―五百塵点劫の 解釈をめぐって

北川 前 肇

法華経本門の如来寿量品には、釈尊みずから始成正覺を破して、その寿命の久遠なることが開頭されている。すなわち、「然善男子我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫」と発迹頭が示されている。この次下には、釈尊の寿命が久遠であることを、更に五百塵点劫の譬喩をもつて説かれるのである。

この五百塵点劫の解釈は古来より論議が喧しく、有始・無始、常住・無常、実説・仮説等の解釈がなされてきた。そこで、この小稿では、日蓮聖人の遺文に引用され